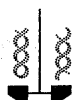


会 報



平成13年度 日本生物工学会 年次大会 後記

日本生物工学会の平成13年度大会が去る平成13年9月26日(水)から28日(金)にかけて山梨大学で開催され、盛会のうちに無事終了した。

地方の小規模大学での開催は初めての試みであり、講演会場数の確保から、宿泊者のホテル、交通機関の事など大都市での開催とは違った困難が予想され、不安の中に準備を進めた。山梨大学にとって唯一の希望は環境の良さであった。天気恵まれれば富士山、南アルプス、八ヶ岳を間近に望み、ワインと宝石、温泉に恵まれた環境での開催となり、研究発表はもとより、日頃の疲れを癒せる大会になることが期待された。幸いにも大会期間中は好天に恵まれ、大会プログラムを順調に実行することが出来た。

本大会の主会場は山梨大学キャンパスで、ここに一般講演会場10、シンポジウム会場3、機器展示会場を準備した。甲府駅近くにサテライト会場(ベルクラシック甲府)を設け、ここで授賞式と懇親会を行った。主会場で行われた講演総数は664件で、内訳は一般講演565件、シンポジウム15テーマ90件、招待講演3件、受賞講演5件、特別講演1件であった。また、大会参加人員は正会員729名、学生会員361名、非会員139名で、合計の大会参加登録者数1229名(招待者を含めた参加者は約1300名)であった。

機器展示会場には食堂がある大学会館を利用し、なるべく沢山の人来場いただけるよう工夫した。出展協力企業数は山梨県内のバイオ関連企業2社を含め全30社で、その他に公設機関のブースも設置した。また、展示会場への集客効果を上げるため、ワイン600本を用意し、抽選会を企画した。当選確率を高く設定したため、好評を得て相当の集客効果があった。

第1日目には、午前中に授賞式があり、谷吉樹会長の挨拶、受賞選考経過報告に続き、生物工学賞(今中忠行氏、山根恒夫氏)、技術賞(倉根隆一郎氏、野畑靖浩氏)、江田賞(渡辺 睦氏、下

飯 仁氏)、斎藤賞(吉田和哉氏、中山 亨氏)、照井賞(高木睦氏)、論文賞(本田 淳氏ら、酒井康行氏ら、青井義輝氏ら、中島敏博氏ら、近藤昭彦氏ら)が授与された。写真撮影の後、今中忠行氏より「極限環境微生物の探索と利用」、山根恒夫氏より「微生物、酵素および遺伝子の関与する反応の工学的研究」、続いて倉根隆一郎氏より「微生物の生産する高機能性バイオポリマー」と題する受賞講演が行われた。初日の午後より、3日目午後まで一般講演、シンポジウム、その他の受賞講演、招待講演、特別講演が予定通り盛会のうちに終わった。以下に今大会に関わる特記事項を列記した。

1) 電子登録関係：一般講演の電子登録に加えて、本年度は新たにシンポジウムの電子登録も行った。一般講演の方は、従来通り郵送による登録も受け付けたが、一般講演565件中の94%が電子登録であった。しかし、登録上の注意事項が十分に守られていないために、人名、所属、キーワード等の入力形式が統一されておらず、その修正には大変な手間がかかった。一方、シンポジウムの方はすべて電子登録とした。登録はオーガナイザーにお願いして、一括して登録していただいた。初めての試みであったので、オーガナイザーの方にはいろいろとご面倒をおかけしたが、御陰様で入力ミスは少なく、プログラム編成が省力化された。

2) 会場について：山梨大学は教育人間科学部と工学部の2学部の小規模大学であるため、講演会場として使用できる広さを持つ教室の確保には苦心した。このため、講演プログラムを最終日(3日目)の午後までセットする事が必要であった。会場機器のセッティングに関しては何回かの練習を行ったものの、初日にはマイクロホンの混信があり関係者にはご迷惑をかけた。一方、キャンパスが広域でないことと講演会場数が少なかったため、会場の案内はわかりやすいとのことであった。また、各会場とも多くの参加者数があり盛況であった。発表テーマと会場の選定(席数)に関しては、前年度の北大からのデータが大変参考になった。

3) シンポジウム：前年度大会関係者からの引継事項として、シンポジウム数と一般講演のバランスに関し注意があったので、当初は10テーマ程度のシンポジウムを予定していたが、企画の段階で徐々に増加し15テーマに増加してしまった。これ以上の希望もいただいたが、会場の関係でお断りせざるを得なかった。

4) 懇親会：学会の重要イベントである懇親会はベルクラシック甲府で行われたが約450名の参加者があり、大変な盛り上がりであった。かなり広いスペースの会場を用意したが、予想を上回る参加者があった。懇親会のオープニングは山梨大学合唱団による混声合唱でスタートした。料理、飲料に関しては山梨県の関連企業からのご寄付を中心に地方色を出した品揃えで用意した。

5) 生物工学若手研究者の集い(通称若手会)：若手会の総会及び交流会が、例年通り第一日目の夕方からキャンパス内のグリルで開かれた。一般52名、学生47名、合計99名の参加者があった。当日の参加者が多く、参加者が予約登録の2倍近くになったため、料理の方は若い胃袋に早々に収まってしまったが、記念ボトルの県産ワインを十分に用意したので、ワインを酌み交わしての交流が大いに盛り上がった。



受賞のみなさん

6) 韓国からの参加：韓国からは招待講演3件と6件の一般講演が行われた。韓国生物工学会などからの参加者26名との歓迎交流パーティーも催され、日韓の友好が深められた。

今回の大会は、東日本支部の事業として田中支部長をはじめ支部組織の多くの方々ならびに学会事務局のバックアップのもとに行われた。スケジュールの企画に当たっては前年度大会を担当された北大の実行委員の方々からの貴重な助言と資料を参考にさせていただいた。山梨地域には24名の会員しかおらず、いわゆる地方の大学での開催は初めてであり、その意味で成否が問われる大会であったが、21世紀の幕開けとなる大会を山梨大学でおおむね成功裡に実施する事が出来た。大会に関して科学新聞(第2867号)に大きく掲載された。また、大会の様子は多くの新聞、テレビで扱われた。

交通等不便な中を多数の会員に参加いただいたことが本大会の盛況につながったものと感謝申し上げます。

(文責 天野義文)

平成13年度 第3回理事会議事録

1. 日 時：平成13年6月7日16時30分～17時
2. 場 所：千里ライフサイエンスセンター会議室
豊中市新千里東町1-4-2

3. 出席者：谷会長他16名

4. 議事の経過および結果

第1号議事 各賞受賞者選考

谷会長は、以下の各受賞候補者選考委員会の選考結果に基づいて、受賞することの可否について諮ったところ、委員会報告のとおり承認することを決定した。

なお、選考過程における課題として下記の意見が出され、今後検討していくこととなった。

1) 斎藤賞、照井賞は若手の奨励賞で、受賞候補者自身の業績が評価対象となっており、賞の価値は大きい。にもかかわらず、その名称から、学会外部で賞の性格が十分認識されない恐れもあるので、「奨励賞」という賞の性格が伝わる名称が望ましい。

2) 「比較的若手」ではあいまいである。年齢を明記すべきである。

3) 江田賞は醸造関係の最高賞という位置づけにあり、斎藤賞、照井賞と異なる。この点から、醸造関係には若手の奨励賞の新設が望ましい。

4) 功績賞の新設も必要である。

(1) 第9回論文賞受賞選考委員会

新名選考委員長は、24候補論文に対する投票結果から上位4論文をまず決定し、次いで次順位の8件から1件を決定したと報告した。

1) 「Direct refolding of recombinant human growth differentiation factor 5 for large-scale production process」

2) 「Rapid and sensitive neurotoxicity test based on the morphological changes of PC12 cells with simple computer-assisted image analysis」

3) 「Construction and characterization of phage libraries displaying artificial proteins with random sequences」

4) 「Improvement of productivity of active horseradish peroxidase in *Escherichia coli* by coexpression of Dsb proteins」

5) 「Microbial ecology of nitrifying bacteria in wastewater treatment process examined by fluorescence *in situ* hybridization」

(2) 第10回技術賞受賞選考委員会

隅野選考委員長は全員一致で倉根隆一郎氏らの「微生物の生産する高機能バイオポリマー」に決定した旨報告した。

(3) 第34回江田賞受賞選考委員会

新名選考委員長は投票の結果2名の候補者が同数となり、渡辺睦候補および下飯仁候補の2名に決定した旨報告した。

(4) 第37回斎藤賞受賞選考委員会

谷選考委員長は、若手研究者に対する奨励賞および対象分野拡大を考慮して2名に贈呈することで選考を進め、吉田和哉氏および中山亨氏に決定した旨報告した。

(5) 第24回照井賞受賞選考委員会

隅野選考委員長は全員一致で高木陸氏に決定した旨報告した。

(6) 第20回生物工学賞受賞選考委員会

谷選考委員長は4名の候補者は第1回投票では過半数に達せず、上位2名の決戦投票の結果同数となり、今中忠行氏および山根恒夫氏の2名に決定した旨報告した。

第2号議事 その他

原島理事が、第1回常任理事・支部長会議の主な議事結果について紹介した。

平成13年度 第4回理事会議事録

1. 日 時：平成13年9月27日12時～13時
2. 場 所：山梨大学 T1号館8階会議室6、会議室7
甲府市武田4-3-11

3. 出席者：谷会長他13名

4. 議事の経過および結果

谷会長が挨拶した後議事に入った。

第1号議事 平成13年度事業および決算の中間報告

原島庶務担当理事は、資料に基づいて本部および支部の事業、会議開催状況および会員異動状況について報告した。さらに、来年の総会を東京で開催し、併せてミニシンポジウムを新設すること、JABEE(日本技術者教育認定機構)に対して、生物工学の分野認定を申請していること、および支部長の位置づけを明確にすべく支部規定改訂の作業を進めていることを紹介した。

山根会計担当理事は、資料に基づいて貸借対照表、正味財産増減計算書、収支計算書の要点を説明し、現在まで正常に推移していると報告した。

川崎和文誌編集担当理事は、資料に基づいて原稿受付状況、投稿数、掲載数について報告し、投稿数の増加を図るとともに、会

員相互のパイプ役を担うような誌面づくりを目指していくことを報告した。

室岡英文誌編集担当理事は、資料に基づいて原稿受付状況、投稿数、掲載数について報告し、例年以上に投稿が活発であり、海外からの投稿も30%強でユニークな論文も見受けられることを報告した。また、メドラインへの掲載申請が却下されたこと、海外エディターの見直し、80周年記念事業に関係する若手中心のレビュー記事、表紙の改訂等を計画していることを紹介した。

山田電子・情報編集担当理事は、資料に基づいて3つのツールで電子情報化を進めていること、およびホームページの英文コンテンツを準備中であることを報告した。

谷会長がこれらの報告について意見を求めたところ、電子情報化が進むと講演要旨集の販売数が減少することにならないかとの質問が出された。これに対して山田電子・情報編集担当理事はバックナンバーが対象となるので、販売数には影響がないと答えた。その他は特に異議なく承認された。

第2号議事 80周年記念事業計画について

谷会長はアジア賞、記念出版、バイオインターハイ、IT基金、産学連携基金等の80周年記念事業の概要について説明し、最後に募金への協力を求めた。

第3号議事 新入会員申請の承認

原島庶務担当理事は、資料に基づいて平成13年8月末日までの入会申請者（正会員62名、学生会員199名、団体会員2社、賛助会員1社）の承認提案をおこなった。谷会長が承認の可否を求めたところ、異議なく申請者全員を承認した。

第4号議事 研究部会規定の改訂

原島庶務担当理事は、研究部会終了後におこなう報告の場が、年次大会におけるシンポジウムに限定されていること、このためにシンポジウムの数が多くなりすぎて、一般講演が圧迫されている現状を踏まえ、複数の場での報告を可能とし報告の場を分散させることによりシンポジウムと一般講演の発表件数のアンバランス是正を図るといふ、研究部会規定改訂の提案理由を説明した。谷会長が提案説明について意見を求めたところ、特に異議なく原案のとおり承認された。

平成13年度 第2回評議員会議事録

1. 日 時：平成13年9月28日（金）12時～13時
2. 場 所：山梨大学 K号館会議室9（K-228）
甲府市武田4-3-11
3. 出席者：赤塚 昌隆氏他53名
4. 議事の経過および結果

黒木事務局長は、委任状を含め2分の1以上の出席者数（本人出席53名、委任状57名）を確認し評議員会の開会を告げた。また、定款にしたがい議長の選出を諮ったところ田中渥夫氏を全員一致で選出した。

議長は議事録署名人に大嶋泰治および卜部 格の両氏を指名した後、議長および会長が挨拶し議事に入った。

第1号議事 平成13年度事業および決算の中間報告

原島庶務担当理事は、資料に基づいて本部および支部の事業、会議開催状況および会員異動状況について報告した。また、昨日開催された理事会において、シンポジウムと一般講演の件数バランスの是正を目的とした研究部会規定の改訂が承認されたことを報告した。さらに、来年の総会を東京で開催し、研究部会規定改訂を反映させた最初の試みとしてミニシンポジウムを併設すること、JABEE（日本技術者教育認定機構）に対して、生物工学の分野認定の申請作業を進めていること、および支部長の位置づけを明確にさせるべく支部規定の改訂を検討中であることを紹介した。

山根会計担当理事は、資料に基づいて貸借対照表、正味財産増減計算書、収支計算書の要点を説明し、現在まで正常に推移していると報告した。

川崎和文誌編集担当理事は、資料に基づいて原稿受付状況、投稿数、掲載数について報告し、投稿数の増加を図るとともに、会員相互のパイプ役を担うような誌面づくりを目指していくことを報告した。

室岡英文誌編集担当理事は、資料に基づいて原稿受付状況、投稿数、掲載数について報告し、例年以上に投稿が活発であり、海外からの投稿も30%強でユニークな論文も見受けられることを報告した。また、メドラインへの掲載申請が却下されたこと、海外エディターの見直し、80周年記念事業に関係する若手中心のレビュー記事、表紙の改訂等を計画していることを紹介した。

山田電子・情報編集担当理事は、資料に基づいて3つのツールで電子情報化を進めていること、およびホームページの英文コンテンツを準備中であることを報告した。

議長がこれらの報告について意見を求めたところ、木田評議員から、研究部会の報告は終了後でよいのかと質問がなされ、谷会長が活動の途中でもよいしあるいは終了後でもよく柔軟に対応してよいとの見解が示された。

第2号議事 80周年記念事業計画について

谷会長がアジア賞、記念出版、バイオインターハイ、IT基金、産学連携基金等の80周年記念事業の概要について説明し、最後に募金への協力を求めた。

これに対して、谷口評議員から、会員減につながるような募金の強制は避けるべきであるとの提言がなされ、谷会長は分納あるいは次年度以降での納付等フレキシブルに対応していく旨の方針が示された。

また、木田評議員から、産経新聞に掲載された記事を新聞以外で読む手段があるかとの質問に対して、新名副会長が産経新聞のホームページからアクセス可能であり、掲載完了後には単行本としての出版も予定されている旨の答弁がなされた。